

1 単元名 「いなばのしろさぎ」～すぐそこにある古典～

2 授業構成

(1) 教材に対する反省と新しい提案

本校国語科では、「ことばを使って思考、想像し、ことばによって他者とコミュニケーションすることを通して世界や他者、自己を認識し、表現する力を育てる」というねらいを設定し、個人としては「ことば」に対する感性を磨く単元開発を中心に、ここ数年研究実践を重ねてきた。特に昨年度は、担任した児童に対し1年間を通して語彙の習得に力を入れて実践した。「語彙が豊かになれば物語の読みも深まり、読解力が増す。」という仮説のもとに様々な方法で具体的な実践をした結果、1年間で語彙力は有意性を持って向上したが読解力の伸びはまだデータとしての向上は見られなかった。そして意外なことではあったが、実践を施した学級の児童は1年間で読書意欲を表す数値が少々下がったという傾向が見られた。考察するに、ことばに特化して児童の関心を強めすぎた結果、物語のストーリーを純粹に楽しむ気持ちが浅くなってしまった児童がいるのではないかと思われた。おそらくわずか1年間の実践では、その状態を乗り越えて読解力を高めるまでに到達できなかったのであろうが、やはり児童のことば（語彙力）の学習と物語などに読み浸るような学習活動とのバランスをとって行うことが大切であると強く感じるようになった。

そこで、今年度はことばを大切にしながらもまずお話を楽しむということを重視して実践してきた。学習指導要領の改訂に連動して[伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項]に関わる教材文として各社の低学年教科書に神話が採用されているが、児童の様子を見る限り、昔話すらあまり知らない児童が多くなっている実態があり、「天の岩戸」や「海幸山幸」などの神話を読み聞かせてもらうような状況は見られない。かろうじて「いなばのしろさぎ」「やまたのおろち」を知っている児童がいるだろうが、これは現在児童が鳥取市に住んでいる、また鳥根県が近くにあるという状況が幸いしているとも思われる。

そこで、今年が編纂1300年ということで話題に上ることも多い古事記の中から本校からも近い白兎海岸を舞台にした「いなばのしろさぎ」を取り上げ、昔話よりも遠い昔の物語が今の生活場所にも残り、続いているという不思議なリアリティーや親近感を楽しみながら、これらの神話の場面やそれを語り継いだ人々をイメージさせ、お話の世界に浸る学習を設定した。

児童が読む絵本や物語は、ほとんどが架空の人物が登場する架空の物語で、最初から書き言葉によって作られている。架空という点でその対角にあるのは事実を描いたノンフィクションになる。昔話や神話はその中間の、事実のようにして言い伝えられた話を再話として書き言葉にして残したもので、実在したような人物や架空の動物、また実際にあった出来事や架空の出来事が混在して登場する。そして、特に神話には白兎海岸や天岩戸神社、出雲大社など実在の場所が存在し、低学年の児童はフィクションとノンフィクションの間を心地よくさまよって、お話の世界を楽しむことができるのではないだろうか考える。言い伝えは、文字通り先人が言って伝えたものであり、まだ文字が生まれる以前の大昔からの人々が様々な願いや大切なこと、教訓などを伝えてきたものだ。大昔から人々はお話が好きで、ずっと楽しんできていた。そのような物語の世界に、児童をどっぷりと浸らせられるよう、身近な「いなばのしろさぎ」を中心教材に設定し、「やまたのおろち」「あめのいわと」なども関連させながら単元を組んだ。

(2) 子どもの学びの実態・期待する学び方

1年生のこの時期の児童は、まだ体験による学習が学びの大部分を占めており、自分が見聞きし行ったこと以外には関心が薄かったり、学びが定着しにくかったりする。逆に言えば、実際に体験したことには大変関心を示し、自分とかかわらせて学習を深められるということである。絵本などを読み聞かせる場合に、初めての本よりも以前に読んでもらった本や既に自分で読んだ本などのほうに強い関心を示すのもその一例だ。

本単元で取り上げる神話は、どれも身近な場所にその痕跡が残っているお話であり、特に「いなばのしろうさぎ」に関しては、物語の場面である白兔海岸が、本校より西に約6kmの場所に位置し、主要な国道沿いなので児童も比較的頻繁に通る場所である。また、鳥取市のシンボルの一つとして、鳥取市内のあちこちにイラストやマークとして使われていることにも気づく。大きな橋の名称表示板には大国主命（大黒様）とうさぎのマークが使われ、テレビのCMでもうさぎ型のおまんじゅうの宣伝にアニメの物語が流されている。「いなばのしろうさぎ」や大国主命は、児童にとって既に身近でよく知っている存在である。そのため、多くの児童は「いなばのしろうさぎ」の物語を大まかには知っているだろうが、神話の一部としてのそれや、その前後につながる神話とのつながりを知る児童はいないだろう。特に、大国主命が古事記の重要人物として、さらに様々な冒険を続け、出雲大社にまつられることなどは未知のこととして関心を持って受け入れられると考える。遠い昔の神話ではあるが、今回、実際に白兔海岸や白兔神社を見学に行き、現地を自分の目で見る体験も組み入れ、さらに身近に自分との関わりを感じながら、物語を深く楽しむことができるよう支援したい。

(3) 本時の学習に向けての教材研究

今年は古事記編纂1300年ということで、隣県では「神話博しまね」が開催され、鳥取市内でも各書店には古事記関連の書籍コーナーが設置されている。また、前述の通り、各社の教科書に神話が取り上げられたこともあって幼児・児童向け神話絵本も出版・再版されるなど神話ブームともいえる状況もみられる。神話を神様の話として信仰の対象と考え、教育の場にふさわしくないという考えを持つ人もいれば、日本の起源にさかのぼり、天皇制との関連から意見を持つ人もいる。現に神話は、一時期は日本の歴史としての教育の題材にされ、戦争への大義名分に使われていたと聞く。しかし、ここで児童と楽しむ神話は、豊かな想像力や願い、畏れ、祈りから生まれた、日本人のおおらかさや人間らしさを表す素晴らしい伝統的な言語文化として児童に触れさせる価値のあるものだと考える。

古事記は、驚異的な記憶力を持つという稗田阿礼が読み習った物語を太安万侶が編纂して七一二年に完成させたものだ。原文は古典なので、1年生の児童に与えるのに直訳したものでは難しい。そこで、「いなばのしろうさぎ」については、光村図書・教育出版・三省堂の教科書や講談社・金の星社・あかね書房・佼成出版社などの絵本から教材文として適当なものを選択した。その結果、原典の流れにほぼ沿っており、八十神やしろうさぎの予言などの記述もある光村図書の文章（中川李恵子）を採用して、他の本の挿絵なども活用しながら理解を助けるようにすることにした。出雲大社や稲佐の浜、白兔海岸などを訪れ、今に続く神話の思いを指導者自身が体感して、教材と児童に向き合うことも教材研究の柱となっている。

3 単元の目標

山陰の各地を舞台としている神話を読み、大昔から伝わる物語の世界を楽しむことができる。

4 学習計画（全5時間）

第1次 神話について知り、「国生み」「やまたのおろち」の話を聞く。（1）

第2次 「あめのいわと」の話を聞き、ロールプレイを楽しむ。（1）

第3次 「いなばのしろうさぎ」の話を楽しむ。（3）

第1・2時 白兔海岸・白兔神社に行き、「いなばのしろうさぎ」との関わりを知る。

第3時 見てきたことと「いなばのしろうさぎ」の話を結びつけながら、楽しむ。【本時】

5 本時について

(1) 本時目標

○白兔海岸・白兔神社で見たことと「いなばのしろうさぎ」の話を結びつけながら、神話を身近に感じて楽しむことができる。

(2) 準備 唱歌「大黒さま」CD 提示用写真 お面（大国主命 白うさぎ ワニザメ）

(3) 本時の展開（○教師の意図 ◇全体への支援 ◆個への支援）

学 習 活 動	教師の意図・支援
1 本時の学習のめあてを知る。 ・唱歌「大黒さま」を歌う。	○白兔海岸で見た歌碑にある唱歌を歌うことで、見てきたことを思い出させて本時の学習につなげる。
白兔海岸で見たことを思い出しながら、 「いなばのしろうさぎ」のお話を聞きましょう。	
2 実際に行って見たものや場所を発表し、物語とのつながりを確認する。 ・白兔海岸の淤岐の島 ・「大黒さま」の歌碑 ・大国主命と白うさぎの像 ・白兔神社 ・御身洗池（みたらしいけ）（不増不減の池） ・身干山跡	○写真を見ながら、物語の場面とつなげることによって、お話を現実に近い感じさせ、物語の中に入り込めるようにする。 ◇白兔海岸や歌碑の写真などを提示する。
3 「いなばのしろうさぎ」の読み聞かせを聞く。	○前時までに知っている話と、実際に見てきたものや場所を思い浮かべさせながら、指導者の声のみの朗読を聞かせイメージを膨らませたい。
4 大国主命と白うさぎ、ワニザメの役になり、ロールプレイをする。 ・「やあい、だまされた。こっちにわたりたかっただけだよ。」 ・「よくもだましたな。かわをはいでやる。」 ・「かわいそうに。きれいなみずであらって、がまのほにくるまりなさい。」 ・「たすけてくれてありがとう。あなたはやさしいかみさまですね。」	○物語の文章中にあったような内容を、それぞれの役で自分なりのことばで表現させることによって、言語文化を口承で語り継ぐことを疑似体験させたい。 ◇お面をつけさせて、それぞれの役の気分を高める。 ◆それぞれの写真に合わせて、キーワードを板書しておき、台詞のヒントにできるようにする。
5 その後の大国主命の話を聞き、その他の神話の本の紹介を聞いて、神話への関心を高める。 ・スセリヒメとの結婚 ・出雲大社 ・ウミサチヒコヤマサチヒコ	○「いなばのしろうさぎ」の後に続く大国主命の冒険の話を知らせ、地元や日本各地に残る神話を身近に感じたり興味を持ったりするように発展させたい。